

【資 料】

日本における仏教看護の歴史

—看護の歴史的研究(その1)—

関谷 由香里*

【要 旨】

本稿は、日本における看護の歴史の中で、古代から中世まで看護の主流をなしていた仏教看護について総括的にまとめたものである。

まず、仏教看護の起源について、釈尊の時代に遡り、仏教医学との関連も含めて概説した。

次に、日本における仏教看護について、それぞれの時代背景と、仏教看護ならびに仏教思想に基づいた社会事業を行った人たちを中心に、その看護の方法について述べ、今日、仏教看護が継承されていない要因について考察を加えた。

最後に、仏教看護の原典として、『摩訶僧祇律』巻第二十八の「病比丘法」に訳注を施したものを附した。

【キーワード】 仏教看護, 仏教思想, 看護の歴史

はじめに

今日までに、日本の看護学の領域において、「看護の歴史」について公表された論文や著書は非常に少ない。例えば、昨年1年間に公表された看護系の論文は4786件、その中で「看護の歴史」に関するものは僅かに28件であった¹⁾。

また、日本の「看護の歴史」に関する著書は、個人史ならびに基礎看護学のテキストを除けば、管見の限りでは、1950年から現在までに僅か30冊刊行されているのみである²⁾。日本の「看護の歴史」に関する論文・著書数が、看護の歴史的研究の動向を示しているとするならば、日本の看護学における歴史的研究は立ち後れていると言わざるをえない。

今なお、日本の看護の歴史を研究することは、史学が「共同体をなす存在としていろいろ活動する人間の空間的・時間的発展の諸事実を、その時々々の共同体から見た価値に関係させた心理的・物質的な因果関係について究明しかつ叙述する科学である」(ベルンハイム, 1920, p.74) というベルンハイムの言に基づけば、現在までの日本の看護の変遷を歴史的・社会的・文化的文脈の中で正しく認識し、将来のあるべきすがたを予測することにつながるという意義がある。

しかし、日本の看護に関する歴史的研究に際して問題となるのは、前述したように、その歴史的研究

の成果が極めて限られているということである。

そこで、本稿では、本稿が看護の歴史的研究の一資料となり、ひいては日本の看護に関する歴史的研究の進展に資することを目的として、日本において中世まで、職業として行う看護の主流をなしていた仏教看護の変遷を遡り、仏教看護が行われていた時代的・社会的背景とその有り様を捉え、仏教看護の衰退の原因について考察を加えた。研究方法は、日本の中世以前になされていた仏教看護に関する検索・収集可能な一次・二次資料を渉猟・検討し、仏教看護の概説を行うとともに日本におけるその歴史をまとめ、日本の仏教看護関連年表(表1)を作成した。

また、本稿に、仏教看護に関する一次資料として、『摩訶僧祇律』巻第二十八の「病比丘法」に訳注を施し、仏教看護の原初である釈尊による看護の有り様について今日の看護との比較検討を添えて附した。

1 日本における仏教看護の変遷

1 仏教看護の起源

まず、本稿でいう仏教看護とは、仏教の思想と実践行を基盤とした看護を指す。当然のことながら、仏教の経典には看護³⁾ということばは用いられておらず、瞻病、看病ということばが多用されている。したがって、本稿では、経典や時代に従

* 日本赤十字広島看護大学 基礎看護学

って、看病と看護を同義として扱うこととする。

本来、仏教において看病は、慈悲心の最高最善の発露として重要視されていた。仏教修行者の戒律について説かれている『梵網経』⁹¹には、八福田⁹²の第一に看病があげられており、僧侶の修行としても重んじられていた。それは、釈尊の時代から、仏教教団内の病気になった比丘（以下、僧侶と表す）を看病するのは、同じ道を歩んでいる僧侶より他にはなく、出家僧の戒律としても經典に残されている。最も原初のものには、『十誦律』、『摩訶僧祇律』等がある。

さて、仏教看護とは不可分の関係にあるのが仏教医学である。なぜならば、釈尊の時代は、医学・医療と看護は未分化な状態であったからである。仏教教団内で僧侶の健康を維持し、病気の治療・予防をするためには医学的知識が必要であり（杉田,1997,p.30-31）、看病の方法はその中に包括されていた。当時の仏教教団内では、病気に関する知識を持っていた僧侶が治療・看護に当たっていたといわれており、中でも釈尊は、出家前は虚弱な体質で、耆波⁹³という名医が侍医であり、釈迦族の王子として五明⁹⁴を修していたので相当の医学的知識を有していたと考えられている（杉田,1997,p.17-28）。

ここでいう医学的知識とは、インドの伝統医学であるアーユルヴェーダ医学の知識に基づいており、仏教医学とは、仏教思想（特に「慈悲」の思想）を基盤として形成されたアーユルヴェーダ医学の知識に基づく医学を指し、釈尊の時代からの治療・看護に関する伝承や仏教教団内で病気や治療に詳しかった僧侶の知識が、その時々で經典に残されて、後世に伝わったものである。つまり、仏教医学は初めから体系化されていたものではなく、經典に残されていた医学的知識が、後に体系化されたものだといわれている（杉田,1997,p.32-35）。

ここで、仏教医学について概略を述べることにする。仏教医学では、我々の身体は、風・火・水・地の四大元素⁹⁵から構成されており、この四大元素のバランスが崩れると病気になるという病因論（四大不調説⁹⁶）に基づいている。仏教の四諦⁹⁷は、釈尊の在世当時の医学・診療の4段階に習ったと言われているが（杉田,1997;難波,小松,2000）、仏教医学の実際の診療では、患者の症状を苦諦、病気の原因を集諦、原因を除去することを滅諦、治療方法を道諦として捉えていた。仏教医学の治療法としては、原因の除去、薬物投与

（食事療法も含む）、精神療法、養生法などがあげられている（酒井,1982,p.36）。

2 日本における仏教看護

我が国における仏教看護の濫觴は、538（552）年に百済から伝来した仏教の篤信家であった聖徳太子による看護・救療事業に始まるとされている（大日方,1966,p.37-39）。それ以前の、風土記や記紀神話にみられる看病・手当は、呪術や経験的療法に準じたものであったと考えられている（酒井,1982;大日方,1966）。日本の上代・古代において、外科的治療を除いて、厳密な医学・医療と看護の分化はなされていなかった。したがって、医療にあたるものは両方の知識と経験を備えていたと考えられる。それは長く、現在の医療と看護の役割を医師が一人で担っている中国医学・医療に、看病・看護の独立概念がなかったことと同様の経緯であろう。

その後、仏教看護は、『養老律令』の「僧尼令」第2条に

凡そ僧尼、吉凶を卜ひ相り、及び小道、巫術して病療せらば、皆還俗。其れ仏法に依りて、咒を持して疾を救はむは、禁むる限に在らず。（井上,1976,p.216）

とあるように、僧尼⁹⁸に許された行為となった。僧尼令にしたがう僧尼は官僧と呼ばれ、国家権力によって庇護され、各地に配置されていた。奈良時代以降、鎌倉時代末まで、日本における仏教看護の一つの流れとして、このような官僧による看護があげられる。

一方、別の流れとしては、僧尼令にしたがう出家僧としての修行を終えた後、大寺院や国分寺を離れ市井に身を投じ、民衆の救済にあたった通世僧による仏教看護があげられる。

奈良時代以降、僧尼が医療・看護に携わっていた理由は、釈尊に倣い、出家僧は基礎教養として医学を含む五明⁹⁹を学ぶものとされていたからである。したがって、修行を終えた僧侶は皆、一通りの医学的知識を有しており、先の「僧尼令」にもあるように、仏教思想に基づく医療・看護の実践者として公認されていたと考えられる。特に奈良時代、仏教の興隆も相俟って、仏教を修し、十分な医学的知識を備え、実際の医療・看護に関する豊富な体験を有する僧尼が、医師（僧医）あるいは看護者（看病僧・看病禪師）となって、上は皇室から下は民間にいたるまで、医療・看護の大半を担っていたと考えられている（酒井,1982;新村,1997）。

以下、上代から鎌倉時代までの、仏教看護の実践

者とその時代背景、それぞれの看護の方法について述べることにする(表1参照)。

1) 上代

『記・紀』には、崇神天皇の時(3世紀末~4世紀半)、疫病が流行し、多くの人民を失ったということが記されている(倉野, 1958; 高木, 1967)。この疫病について、『古事記』ではの祟りであるとされているが、実際は、中国や朝鮮半島の諸国(百濟, 高句麗, 新羅)との交流を通して、既にこの時代に痘瘡などの疫病が我が国に渡来していたと考えられている(立川, 1990)。当時の医療は、呪能神性を備えた首長が、『日本書紀』¹³⁾にあるのものが定めたとされる「療病法」と「禁厭法」になり、呪術的な方法あるいは経験技術的な方法で治療行為を行っていたとされている(新村, 2001)。

さて、538(552)年に仏教は伝来したが、仏教が受容されるまでには、物部氏(排仏派)と蘇我氏(崇仏派)の権力争いがあった。しかし、蘇我氏が優勢となった結果、聖徳太子による仏教思想に基づく政治がなされることになった。

この時代に、仏教精神に基づく看護・救療事業の実践者として特筆すべきは聖徳太子であろう。彼は、承知の通り、大阪の四天王寺に四箇院(施薬院, 療病院, 悲田院, 敬田院)を建てて、病者や飢えに苦しむ人々を助けた。

2) 奈良時代

奈良時代は、645年に「仏教興隆の詔」が発せられているとおり、仏教が隆盛した時代であり、国分寺の建立、東大寺の大仏建立などに代表されるように、国家事業は仏教に即して行われていた。また、養老律令が公布され、「医疾令」による医療官人制がしかれた(新村, 1993)。その中で、典薬寮には多くの僧侶が起用され、医を職とする僧医や看病を主とする看病禪師・看病僧として活躍していた(酒井, 1982)。この時代の医療・看護は、仏教医学の伝来によって、呪術経験的な治療から、仏法ならびに仏教医学の治療法を用いるようになった。それは、仏教医学の病因論である四大不調に対して、不調となった原因を前世の業や不摂生にもとめ、不調の程度に応じて加持祈祷や薬物療法、あるいは精神療法や養生法による治療が行われた(酒井, 1982; 二本柳, 1994)。

奈良時代、仏教の慈悲の精神に基づいて看護・救療事業を実践したのは次のような人々であった。

(1) 光明皇后(701~760)

聖武天皇の皇后、藤原鎌足の孫にあたる。730年に皇后宮職に施薬院と悲田院を設け、自らも直

接癩病人の看病にあたり、入浴させたり、食事や薬を与えたという言い伝えがある(杉田, 1997)。

(2) 和氣広虫(730~799)

和氣清麻呂の姉、仏門に入って法均を名のる。都の自宅に親のない子供を收容し、人を雇って養育した。日本で最初の養護事業といわれている。

(3) 鑑真(688~763)

唐の名僧。唐に留学していた日本人僧の招きで、日本に戒律を伝えるために、途中失明の事態に遭いながら、数度の渡航を試みた後、753年に入国した。僧侶としては、広く戒律を伝え、天皇や貴族、僧侶に授戒をして精神的慰安を与え、僧医としては、豊富な薬物の知識を広め、実際に薬物治療に当たっていた。

(4) 行基(668~749)

各地で仏法を説きながら普請を行い、今日でいう社会福祉事業として、架橋、敷道、池堤など人の交通の便をよくしたり、「布施屋」と呼ばれる無料の宿泊所を設けて、旅の途中で泊まる所のない人や病気になった人々を收容していた。

3) 平安時代

この時代は、現存していないが、890年に深根輔仁が『養生抄』七巻を選んだとされ、984年に丹波康頼が『医心方』三十巻を中国の古医書から撰述した。

したがって、僧侶による養生法とは別に、中国医学に基づく養生が、医療・看護に取り入れられたといわれている(酒井, 1982)。

さて、平安時代の前半は、奈良時代に引き続き、国家や貴族が施薬院や悲田院などに関わり、一般の僧侶も看護・救療事業を行っていたが、平安時代後半は、律令制度の衰退に、末法思想¹⁴⁾の影響も相俟って、看護・救療事業も縮小されていった。その中で、念仏聖空也(903~972)は、仏教を説きながら民衆の求めに応じて社会事業を行い、疫病などで倒れ、無造作に放置された無縁者や囚人の遺体の火葬と供養を行ったといわれている(長谷川, 2002)。また、恵心僧都源信は、今日のターミナルケアの一方法に通じる『横川首楞嚴院二十五三昧起請』¹⁵⁾を撰述した。

4) 鎌倉時代

この時代は、新興仏教が起こり、仏教が広く民衆に受け入れられた時代で、仏教の精神を基盤とした僧医が、民間医として積極的に活躍し、官僧から下層の僧侶に到るまで、看護・救療事業を行っていた(酒井, 1982)。その中で、奈良西大寺の叡尊(1201~1290)は、非人(癩病患者を中心とした

皮膚病患者や身体障害者を指す)や囚人の救済に努めたとされている(杉田, 1997)。

次に叡尊の高弟であった忍性(1217~1303)は、奈良の北に「北山十八間戸」と呼ばれた救癩施設を設け、癩病患者に食事を与え、仏の道を説いた。また、鎌倉に「療病所」を建てて、病気になったあらゆる人々の看護・救済に当たったといわれている(杉田, 1997)。叡尊と忍性はともに文殊信仰¹⁰⁾に傾倒していたが、特に忍性は、自分が持っているものは着ているものまですべて人に分け与えていたと伝えられており、日本の仏教者の中で、仏教の慈悲の具現者として現在にまでも名をはせている。

この時代には、良忠(1199~1287)によって『看病用心抄』が著され、浄土教に基づいた終末期の看護が示された。また、僧医であった梶原性全は、『頓医抄』などの医書を著し、その中で、仏教の慈悲の精神に従って医療を行うことなど、医者への倫理に関する提言もしていた。

この他、新興仏教の祖師たちは、戦乱の絶えない武家社会の中で、最も辛酸をなめていた民衆に分かり易い仏教を説いた。その結果としてそれぞれの宗派に別れはしていたが、信仰によって、民衆に現在の生きる拠り所を与え、その死への不安を和らげ、病気平癒などの現世利益をもたらしていた。つまり、平安時代前半までの仏教は、上流社会(支配者階級)のものであったが、この時代になって、民衆に理解され受容される仏教が誕生し、民衆は信仰による精神的な平安を享受されるようになったと言える。

5) まとめ

我が国における仏教看護の実践者の足跡を辿りながら、その概要と変遷について述べた。ここでは、仏教看護あるいは仏教医学を、仏教の慈悲の思想に基づくものとして述べてきたが、仏教には業の思想もある。仏教医学の病因論には、業因があって、天台智顛『摩訶止観』には、仏教でいう四百四病の疾病がいずれも因果応報の果として説明されている。その結果が、癩病や奇病、奇形などの身体障害に対する偏見を生み、日本人に負の病い観を残してきたことも事実である。また、仏教医学や仏教看護を実践するためには、やはり、仏教の根本的な思想を十分理解する必要がある、仏教の行儀・作法を修し、加持祈祷・読経等を行うためには長い年月を要する。これらのことが、今日、仏教看護が継承されていない理由としてあげられることは否めないだろう。

しかし、後に附した「病比丘法」には、実際叡尊によってなされた看護が記されており、その看護の

方法は、当時では優れた予防医学としての方法であり(難波他, 2000)、今日これらの看護ケアが、対象者の日常生活の援助にとどまらず、看護ケアのすべてが、未病の予防につながっていることをここに再認識することができる。また、今日においても重要だと思われることは、叡尊が病気の僧侶の存在に気づかれたことで、存在を認められ尊重されたことで僧侶の孤独と不安が癒されたことであろう。更に、叡尊が僧侶の額に手を当てられたことが、この僧侶にとって何よりの手当てであり、法を説かれたことが、僧侶のこれから先の生き方を示されたことになり、今日でいう僧侶のセルフケア能力を高めたことに通じていると考えられる。このように、仏教看護の起源に立ち返れば、今日の看護の有り様に、時代を越えて潜在的に伝承されている仏教看護の思想と実践を見出すことも可能であろう。

おわりに

本稿では、我が国の中世まで、看護の主流であった仏教看護とその変遷について、その起源と我が国における実践者の足跡を辿りながら概要を述べた。管見によれば、現在仏教看護は、浄土真宗系のターミナルケア施設であるビハーラ¹¹⁾で踏襲されているのみである。また、仏教看護について藤腹は『仏教と看護』を著して、現代の医療社会の中で仏教看護を実践に反映させようとしているが、仏教思想への十分な理解がなされない限り、実現は困難であろう。

現在、本稿であげた救済・看護事業は、社会福祉事業に属するものもあり、仏教の慈悲の精神に基づく管ての僧侶たちの実践が、今日の医療・保健・福祉事業につながるものであったことを確認した。本稿が、看護の歴史的研究の一資料となることを願い、今後も看護の原典を繙くことによって、現代の看護に通じるものを見出すことを今後の課題としたい。

本研究は、日本赤十字広島看護大学の平成13年度共同研究費(奨励研究)の助成を受けて行った研究である。

日本の仏教看護関連年表

西 暦	仏 教 看 護 史	日 本 仏 教 史
紀元前		
4~5世紀	ゴータマ・ブッダ没。	
2世紀	インドで『十誦律』成立。	
紀元前後	インドで『摩訶僧祇律』成立。	
	中国で『金光明最勝王經』	
5世紀	漢訳。	
	〈古代〉	
	本能的療法・魔法医術(呪術)・自己看護→家庭看護。	
522		漢人司馬達等ら渡来し、仏教を奉じる。
538	天台智顛『摩訶止観』を著す。	百済の聖明王、佛像等を日本に送る(仏教公伝、一説552年)。
594	聖徳太子、利他慈愛の仏教の思想に従い、救療事業を行う。四天王寺に四箇院を建てる。	
622		聖徳太子没。
624		初めて僧正・僧都をおく。
645		仏法興隆の詔。十師の制を定める。
653	道昭、仏教医学・看護に関する仏典も将来する。	道昭、入唐し、玄奘に学び、660年頃帰朝。
675	殺生肉食(殺生戒)の詔。	
680	天武天皇の勅命によって、各寺院に救療施設が設けられる。	
701		僧尼令制定。
718	養老律令(「医疾令」・「戸令」)制定。	
723	興福寺に、施薬院・悲田院を設ける。	
728		『金光明最勝王經』を各国に頒つ。
730	光明皇后、皇后宮職に施薬院・悲田院を設けて、自ら看病にあたる。	
735	看病僧玄昉、唐より経論五千余巻をもたらす(仏教医学・看護に関するものも含む)。	
741	看病僧玄昉、藤原宮子の看病僧として迎えられる。	国ごとに国分寺・国分尼寺を設けることを詔する。
743	僧行基、仏法を説きながら社会事業を行う。	大仏建立の詔。
753	鑑真来日、薬物を伝える。	鑑真来日し、戒律を伝える。
763		鑑真没。
766	看病僧道鏡、法王となる。	
788		最澄、比叡山寺(延暦寺)建立。
804		最澄・空海入唐。
816		〈平安時代前半〉
822		国家や指導階級の貴族たちが盛んに社会事業を行う。大多数の庶民は、単
835		純な治療や民間療法、僧・尼による加持祈祷で病気を治していた。
838		空也、社会事業を實踐しながら、民間浄土信仰を広める。
853		丹波の康頼『医心方』(全30巻)まとめる。
938		源信『往生要集』を著す。二十五三昧会結成。
985		この頃までに慶滋保胤、『日本往生極楽記』を著す。
		〈平安時代後半〉
		庶民の病気の治療・看病は主に尼僧が行っていた。
1052		末法到来の年とされる。
1059		施薬院・悲田院の活動が低迷する。
1166		栄西、入宋、同年帰国。
1175		法然、比叡山を下り、専修念仏を唱える。
1187		栄西、再度の入宋(翌年帰朝)。
		〈鎌倉時代〉
1201		この時代の看病は、仏教精神を基調としたものであり、僧侶によって掌握されていた。
1207		親鸞、比叡山を下り、法然の門に入る。
1211		法然・親鸞流罪になる。
1227		栄西、『喫茶養生記』を著す。
1242		法然没。道元、宋より帰国。
1243		叡尊、囚人・非人救済を行う。
1260		忍性、癩病院設立。
1261		日蓮、『立正安国論』を著す。
1262		忍性、鎌倉極楽寺に悲田院・施薬院設立。
1264		親鸞没。
1287		叡尊、大規模な非人救済を~69行う。
1290		忍性、桑谷に癩病院を設立。
1303		悟真寺上人良忠『看病用心抄』を著す。
1302		叡尊没。
1315		忍性没。
1322		医僧、梶原性全『頓医抄』~24を編む。
		虎関師練、『元亨釈書』を著す。

附録 『摩訶僧祇律』卷第二十八「病比丘法」訳注
釈尊によってなされた看病法が記されている『摩訶僧祇律』卷第二十八「病比丘法」に訳注を施した。尚、原文及び書き下し文の漢字は、可能な限り当用漢字に改めた。

〈原文〉

病比丘法者。仏住舎衛城。広説如上。仏語阿難。取戸鑰来。如来欲按行僧房。答言。善哉世尊。即取戸鑰随世尊後。時世尊到一破房中。見有一病比丘臥糞穢中不能自起。仏問比丘。氣力何似。所患増損。答言世尊。患但有増無損。復問比丘。今日得食不。不得世尊。昨日得食不。不得世尊。先昨得食不。不得世尊。我不得食来已經七日。仏問比丘。為得已不食為。不得不食。答言。不得世尊。仏問比丘。汝此間有和上不。無有世尊。有同和上不。無有世尊。有阿闍梨不無有世尊。有同阿闍梨不。無有世尊。無比房比丘耶。答言。世尊。以我臭穢不熹故徙余処去。我孤独世尊。我孤独修伽陀。仏語比丘。汝莫憂惱。我当伴汝。仏語比丘。取衣来我為汝浣。爾時阿難白仏言。置世尊。是病比丘衣我当與浣。仏語阿難。汝便浣衣。我当灌水。阿難即浣世尊灌水。浣已日曝。時阿難抱病比丘举著露地。除去糞穢出床褥諸不浄器。水灑房內。掃除已巨磨塗地。浣床褥。更織繩床敷著本処。澡浴病比丘。徐臥床上。爾時世尊以無量功德莊嚴金色柔軟手。摩比丘額上問言。所患増損。比丘言。蒙世尊手至我額上。衆苦悉除。爾時世尊為病比丘随順説法発歡喜心已。重為説法。得法眼浄。

(高楠順次郎編『大正新修大藏經』第二十二卷律部一)

〈書き下し文〉

「病比丘法」とは、仏、舎衛城に住したまひき。広く説けること上のごとし。

仏、阿難に語げたまはく、「戸鑰を取り来れ、如来は僧房を按行せんと欲す」と。答へて言さく、「善哉、世尊」。即ち戸鑰を取りて世尊の後に随ふに、時に世尊は一破房の中に到りて、一病比丘の、糞穢中に臥して自ら起つ能はざるを見たまひ、仏、比丘に問ひたまはく、「氣力何似、所患増すとやせん損すとやせん」と。答へて言さく、「世尊、患、但増すのみありて損するなし」。復比丘に問ひたまはく、「今日、食を得しや不や」。得ざりき、世尊。「昨日得しや不や」。得ざりき、世尊。「先の昨は得しや不や」。得ざりき、世尊。我れ食を得ざりしより来、已に七日を経たり。仏、比丘に問ひたまはく、「為に得已るも食せざりしや、為に得ずし

て食せざりしや」。答へて言さく、「得ざりしなり、世尊」。仏、比丘に問ひたまはく、「汝、此間に和上ありや不や」。有ることなし、世尊。「同ありや不や」。有ることなし、世尊。「同和上ありや不や」。有ることなし、世尊。「阿闍梨ありや不や」。有ることなし、世尊。「同阿闍梨ありや不や」。有ることなし、世尊。「比房に比丘なきや」。答へて言さく、「世尊、我れ臭穢なるを以て、熹ざるが故に余処に徙り去りたれば、我れ孤独苦しめり、世尊。我れ孤独なり、修伽陀」と。

仏、比丘に語げたまはく、「汝、憂惱すること莫れ、我当に汝に伴たるべし」と。仏、比丘に語げたまはく、「衣を取り来れ、我れ汝の為に浣はん」。爾時、阿難仏に白して言さく、「置かせたまへ、世尊。是の病比丘の衣は、我当に與に浣ふべし」。仏、阿難に語げたまはく、「汝便ち衣を浣へ、我当に水を灌ぐべし」。阿難即ち浣ふに世尊は水を灌ぎたまひ、浣ひ已りて日に曝しぬ。時に阿難は病比丘を抱へ、挙げて露地に著きて糞穢を除去し、床褥(及び)諸の不浄器を出し、水にて房内を灑ぎ、掃除し已りて巨磨を地に塗り、床褥を洗濯し、更に繩床を織りて本処に敷著し、病比丘を澡浴して徐に床上に臥せ(しめ)ぬ。爾時、世尊は、無量功德莊嚴の金色柔軟の手を以て比丘の額上を摩でて問うて言はく、「所患増せりとやせん、損せりとやせん」。比丘言さく、「世尊の手を蒙りて我が額上に至るに、衆苦悉く除りぬ」。爾時、世尊は病比丘の為に随順し説法したまふに、歡喜心を発し、已にして重ねて為に説法したまひしに、法眼浄得たりき。

(西本龍山訳、竹村牧男校訂『国訳一切經』印度撰述部律部十)

〈注〉

- ・和上一和尚。授戒の師。戒師。親教師等と漢訳する。
- ・同和上一和尚をともししているもの。相弟子。
- ・阿闍梨—軌範師・正行と漢訳する。教団の先生役。
- ・修伽陀—仏の十号(十の呼び名)の一つ。善逝と訳す。
- ・巨磨—牛糞のこと。インドでは、牛は神聖化され、牛にまつわるのはすべて人間の役に立つと考えられている。古来より牛糞は、人体の清潔に関しては石鹸の代わりに用いられ、壁や床を清潔にする方法としては、水に溶いた乾燥牛糞が部屋の床などに塗り込まれていた。現在も、農村では行われている。
- ・随順—適すること。
- ・歡喜心—修行または聞法に伴うよろこび。
- ・法眼浄—真理を見る目が清らかなこと。真理を正

しく見る目。小乗では、初果に四諦の理を見ること。大乘では、初地において無生法忍を得ること。つまり、真理の理をさとった心の安らぎを得ること。

〈現代語訳〉

「病比丘法」について、釈尊が舎衛城（現在、インドのウッタル＝プラデーシュ州本部）におられる時に、次のように説かれました。

釈尊が阿難に次のように言われました。「鍵を取って来てください。私は皆の僧房を巡回したいと思います」と。阿難は「わかりました」とお答えしました。そして、鍵を取って来て釈尊の後について行くと、釈尊は荒れ果てた僧房の中に入られて、糞穢にまみれて起きることもできないでいる僧侶に、次のように尋ねられました。「気力は残っていますか。病気の具合は悪くなっているのか良くなっているのかどちらですか」と。僧侶は、「釈尊、病気は悪くなる一方です」とお答えした。また、次のようにお尋ねになりました。「今日、食事を摂りましたか」と。「摂っていません、釈尊」。「昨日、食事を摂りましたか」。「摂っていません、釈尊」。「一昨日は、食事を摂りましたか」。「摂っていません、釈尊。私はこの7日間、食事を摂っていません」。釈尊は、僧侶にお尋ねになりました。「食べるものがあつたのに食べなかったのですか。それとも食べるものがなくて食べられなかったのですか」と。僧侶がお答えするには、「食べるものがなかったのです」と。釈尊は、僧侶にお尋ねになりました。「この房に和上はいますか」と。「おられません、釈尊」。「同和上はいますか」と。「おられません、釈尊」。「阿闍梨はいますか」と。「おられません、釈尊」。「同阿闍梨はいますか」と。「おられません、釈尊」。「この房に他の僧侶はいますか」と。僧侶が次のようにお答えしました。「釈尊、私が汚くて臭いものですから、それを嫌って他の房に移りました。私は一人で苦しんでいます。私は孤独です、釈尊」と。

釈尊は僧侶に次のように言われました。「あなたはもう思い悩むことはありません。私がそばについていますよ」と。釈尊は僧侶に次のようにも言われました。「着ているものを脱いでください。私が洗いましょう」と。この時、阿難が釈尊に申し上げました。「そのままにしておいて下さい、釈尊。私がおの着物を洗います」と。すると、釈尊が阿難に申されました。「あなたは着物を洗ってください。私は濯ぎます」と。そして、阿難が着物を洗い、釈尊はそれを濯がれ、日に干されました。また、阿難は、病気の僧侶を抱えて房外に出し、糞穢を取り除き、

寝具や便尿器なども房外に出しました。そして、房内を水で洗い流し、きれいに掃除をして巨磨を床に塗り、寝具を洗って日に曝し、縄床を織って床の上に敷き、僧侶を入浴させて寝具の上に寝かせました。そうすると、釈尊は、計り知れない功德をもたらす柔らかな御手で僧侶の額をなでられながら、お尋ねになりました。「病気の具合は悪くなりましたか。良くなりましたか」と。僧侶は、「釈尊の御手で額をなでていただいたので、様々な苦しみがなくなりました」とお答えしました。そこで、釈尊は、病気の僧侶に適した法を説かれました。すると、僧侶が歓喜心を起こしたので、釈尊がさらに僧侶のために法を説かれると、僧侶は真理の理をさとった心の安らぎを得ることができました。

〔注〕

- 1) 「看護」をキーワードとして、NICHIGAI WEB ServiceのデータベースMAGAZINEPLUS (2001.1~2001.12) を検索した結果が4786件であった。「看護・歴史」をキーワードとして、同データベースを検索した結果が28件であった。
- 2) 「看護・歴史」をキーワードとして、NICHIGAI WEB ServiceのデータベースBOOKPLUS (1950-2002) を検索した結果、選択条件に適ったものは11件、NACSIS Webcat (1950-2002) を検索した結果、前データと重複しなかったものが2件、合計13件であった。更に「看護史」をキーワードとして、この2つのデータベースを検索した結果、前者が14件、後者が3件、合計17件であった。以上、「看護・歴史」「看護史」をキーワードとして検索した結果、重複の有無を確認し、選択条件に適った「看護の歴史」に関する著書は30冊であった。
- 3) 平尾氏によると、現時点で「看護」という言葉が、日本の史料の中で最初に使われたのは、頼山陽 (1780-1832) の『日本外史』であり、一般に使われ始めたのは、19世紀末 (1875~1876) と考えられている (平尾, 1996, p130-131)。仏教経典『正法眼蔵随聞記』 (懐奘) に「看病外護」という言葉があり、その意味は看病であるが、この「看病外護」が「看護」の典拠か否かは現在検討中である。
- 4) 仏教教団内の戒律についてまとめられた経典。紀元前2世紀頃成立。
- 5) 八福田とは、仏・聖人・和尚・阿闍梨・僧・父・母・病人の八者に、善いことを行うことによって得られる功德のことを指し、その第一に看病があげられている。
- 6) 釈尊在世当時の人物。経典には「医王」と記されている。本名はジーヴァカ・コマーラブルチャ、素性は不明。灌鼻法、痔の手術、脳の手術など外科的医術をはじめ、小児科、薬物療法に秀でていたと言われている (福永, 1972, p4-5)。
- 7) 五明とは、内明 (仏教学) ・医方明 (医学) ・因明 (論理学) ・声明 (文法学) ・工業明 (技術・工芸・呪

- 術・占相学)を指す。釈尊も王子であった頃、これらを学んだと言われている(難波,2000,p218-221)。
- 8) 四大元素の内、風の大元素の性質は“動”,人体では呼吸や放屁,筋肉の運動や新陳代謝の機能などを有する。火の大元素の性質は“暖”,人体では身体の発熱,消化機能を筋肉の運動や新陳代謝の機能などを有する。水の大元素の性質は“湿”,人体では体液及び体液を多く含む組織がこれに属する。土の大元素の性質は“堅”,人体では骨や筋肉の固い組織がこれに属する。
- 9) 四大不調説とは、四大元素のアンバランスによって病気が生じるという説である。これは、アーユルヴェーダの3つのドーシャ(エネルギー)による病因論を巧みに取り入れたものであると言われている(杉田,1997;福永,1972;酒井,1982)。
- 10) 四諦とは、仏教の根本となる思想であり、教えである。つまり、現実世界は「苦」界であり(苦諦)、「苦」の原因は欲望(煩悩)である(集諦)。欲望を滅すれば「苦」もなくなる(滅諦)。欲望を滅するためには八つの正しい行いをしなさい(道諦)ということである。
- 11) 特に戒行清浄な禅師と呼ばれた僧侶は、天皇家の看病にもあたっていた。このことについては、新村拓『日本医療社会史の研究』に詳しいので参照されたい。
- 12) 前掲注7) 参照。
- 13) 『日本書紀』の巻一神代上第八段にその件がある。
- 14) 釈尊滅後、五百年は仏法の正しい教えと行いが継承される正法、次の千年は、仏法の正しい教えのみが継承される像法、その次の五百年以降は仏法が廃れ、世の中も荒廃していくという思想。(諸説がある。)
- 15) 『横川首楞嚴院二十五三昧起請』とは、源信が念仏者で二十五三昧衆を結成するに際して、撰述したもので、特に結衆の中間のうちで病人が出た場合、親身な看病をし、臨終の際には浄土教の教えに則り引導し、結衆が入る廟に葬ることを起請している箇条がある。
- 16) 文殊信仰とは、『文殊師利般涅槃經』に説かれている、文殊の守護を得て、生死の罪過をなくすることができるという功德と、文殊が貧窮・孤独の非人の姿となって現れるので、慈悲の心を以て救済を行うと文殊菩薩の姿に接することができるという教えに基づく信仰である。
- 17) ピハールとは、休養の場所などの意味があり、仏教を背景としたターミナルケア施設として「長岡医療と福祉の里」に建設されている。特色としては、精神的・宗教的ケアを仏教学専攻の嘱託講師あるいは専任の仏教者が分担していることである。

文 献

- 粟屋典子, 洪麗信, 八代利香, 桜井礼子, 草間朋子 (2001). 中国における看護教育と看護管理の現状. *看護教育*, 42 (10), 898-901.
- ベルンハイム (1920) /坂口昂, 小野鉄二 (1975). *歴史とは何ぞや* (初版). 東京, 岩波書店.
- 福永勝美 (1972). *仏教医学詳説* (初版). 東京, 雄山閣.
- 福腹明子 (2000). *仏教と看護* (初版). 東京, 三輪書店.
- 長谷川匡俊 (2002). *宗教福祉論* (初版). 東京, 医歯薬出版.
- 平尾真智子 (1996). 「看護」という言葉の使用のはじめ. *日本医史学雑誌*, 42 (2), 268-269.
- 井上光貞他校注 (1976). *日本思想大系3律令* (初版). 東京, 岩波書店.
- 倉野憲司校注 (1958). *古事記 中巻*, 倉野憲司, 武田祐吉校注, *古事記 祝詞* (初版). pp9-361, 東京, 岩波書店.
- 難波恒雄, 小松かつ子 (2000). *仏教医学の道を探る* (初版). 大阪, 東方出版.
- 二本柳賢司 (1994). *佛教医学概要* (初版). 京都, 法蔵館.
- 酒井シズ (1982). *日本の医療史* (初版). 東京, 東京書籍.
- 新村 拓 (1993). *古代医療官人制の研究* (初版). 東京, 法政大学出版会.
- 新村 拓 (1997). *死と病と看護の社会史* (初版). 東京, 法政大学出版会.
- 新村 拓 (2001). *日本医療社会史の研究* (初版). 東京, 法政大学出版会.
- 杉田暉道 (1997). *やさしい仏教医学* (初版). 東京, 出帆新社.
- 高木市之助, 西尾實, 久松潜一, 麻生磯次, 時枝誠記校注 (1967). *日本書紀 上* (初版). 東京, 岩波書店.
- 立川昭二 (1990). *日本人の病歴* (第5版). 東京, 中央公論社.
- 天台智者大師説, 門人灌頂記 (594) /田村徳海訳, 大久保良順校訂 (1988). *国訳一切経和漢撰述部3 摩訶止観* (改訂版). 東京, 大東出版社.
- [参考文献一年表作成]
- 阿曾洋子 (2001). 看護の歴史. 松木光子編, *看護学概論* (第2版). pp27-53, 東京, 廣川書店.
- 波多野梗子 (2001). 歴史の中の看護. 波多野梗子, 小野寺社紀編, *系統看護学講座専門1 看護学概論* (第13版). pp37-59, 東京, 医学書院.
- 平塚朝子 (1998). 看護の歴史. 伊藤尚子他著, *基礎看護学I* (初版). pp25-44, 東京, 医学芸術社.
- 平尾真智子 (2001). 看護の変遷. 伊藤政子他著, *新看護学6 基礎看護学 [I]* (初版). pp95-122, 東京, 医学書院.
- 亀山美知子 (1999). *新版看護学全書別巻7 看護史* (初版). 東京, メヂカルフレンド社.
- 看護史研究会編 (1997). *看護学生のための日本看護史* (初版). 東京, 医学書院.
- 小玉香津子 (2000). 看護の歴史. 井上幸子, 平山朝子, 金子道子編, *看護学大系第1巻 看護とは [I]* (第2版). pp66-164, 東京, 日本看護協会出版会.
- 沢 禮子 (1999). 看護概念の変遷. 吉田時子, 前田マスヨ監修・編著, *標準看護学講座第12巻基礎看護学 [I]* (第2版). pp4-13, 東京, 金原出版.
- 杉田暉道, 長谷谷洋治, 平尾真智子, 石原明 (2001). *系統看護学講座別巻9 看護史* (第6版). 東京, 医学書院.
- 和田素子 (1996). 看護の変遷. 山_智子監修, 野島佐由美編著, *明解看護学双書 [I] 基礎看護学 I* (初版). pp30-39, 東京, 金芳堂.

The History of The Buddhist Nursing in Japan –The Historical Studies in Nursing (Part1)

Yukari SEKIYA*

Abstract:

This article concerns Buddhist nursing, which was the dominant form of nursing from ancient times to medieval times, in the history of nursing in Japan.

First, I outlined the origin of Buddhist nursing, by tracing it back to the age of Buddha, including its relation with Buddhist medicine. Then I described the backgrounds of the historical periods and the Buddhist nursing methods, focusing on the people who conducted Buddhist nursing and social activities based on Buddhist concepts.

Lastly, I translated and annotated of the “Byoubikuhou,” 28th item in the “Makasougiritsu” volume, which is an original text for Buddhist nursing.

Keywords:

Buddhist nursing, Buddhist concepts, history of nursing

* The Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing